
令和7年度 紀の川流域懇談会 議事骨子

日時：令和8年3月17日

場所：和歌山河川国道事務所 5階 501・502会議室

★ 議事次第

1. 開会
2. あいさつ（近畿地方整備局 和歌山河川国道事務所 所長）
3. 本日の議事について
4. 議事
 - 4-1. 河川整備計画の進捗点検について
 - 4-2. 工事の進捗状況等について
 - 4-3. 特定都市河川、濁水状況について
5. その他
6. あいさつ（近畿地方整備局 紀の川ダム統合管理事務所 所長）
7. 閉会

★議事内容

1. 河川整備計画の進捗について（資料-1）

河川管理者が実施した点検結果の報告をしましたところ、出席委員より下記のような意見が出されました。

- ・ (P10～11：治水①)

治水① 洪水調節施設の整備において、奈良県管理区間の整備率が「0%」と見える表現となっている点について、なぜそのような整理になっているのか。

→ 奈良県管理区間については、国管理区間に影響が出ない範囲で順次整備を実施しています。下市町阿知賀地区、新住地区等では、護岸工事・仮設道路整備・橋台工等を段階的に実施しており、「完成値」ではなく、河川整備計画上の評価整理の結果として現時点では未達扱いとなっています。

- ・ (P10：治水①)

国の方針として、流域内ダムと連携した事前放流が進められているが、紀の川流域で過去3年間に実施実績はあるか。

→ 過去3年間において、事前放流の実施実績はありません。

- ・ (P24～27：環境①)

大滝ダムでは動植物プランクトン調査を実施しているが、過去3年間で淡水赤潮の発生実績

はあるのか。

→ 大滝ダムでは、河川水辺の国勢調査およびダムフォローアップ調査として動植物プランクトン調査を実施しています。過去3年間において淡水赤潮の発生は確認されていません。

・ (P24：環境①)

資料P24（環境①）について、3年後の報告時に生データを確認できるのか。長期変化を見たい。大滝ダム直下では、河床のアーマー化、水質悪化、シアノバクテリア増加、プランクトン増加が懸念される。岩盤データを含め、解析の基となる生データの閲覧性を改善してほしい。植物プランクトンのデータが資料上に十分示されていない点が気になっている。

委員には専門分野の視点でデータを確認・評価してもらえればよい。

→ 詳細な生データは、近畿地方整備局によるダムフォローアップ調査における資料が公開されています。即時提示できるものではありません。河川環境データベースで一般公開されているデータがあります。必要に応じて個別に資料提示は可能となっています。

・ (P28～29：環境③)

アユの遡上量が近年大きく減少している点が懸念される。干潟・汽水域のモニタリング結果において、シオマネキ、ハクセンシオマネキの個体数減少傾向が見られる。魚類相・昆虫相・底生動物相の調査において、重要種が確認されている。特に、オオサカサナエ（トンボ）が確認されており、和歌山県立自然博物館による調査成果である。これらの生物が生息できる河岸・河川敷環境（冠水頻度・礫河原環境）の維持が重要であり、引き続き情報整理・共有をお願いしたい。

→ 下流域の干潟調査は、今年度も実施しており、結果は昨年度と同程度であり、調査時期は夏季となっています。アユの遡上量の増減には海水温などの外的要因も影響するため、単年度評価ではなく、継続的なモニタリングが重要です。

・ (P33～35：環境⑤)

2000年代以降、水道水のカビ臭問題が全国的に課題となっているが、紀の川流域で過去3年間に発生事例はあるのか。

→ 近年（過去3年間）における発生事例は確認されていません。ただし、大淀町より、平成6年の冬に「水道水よりカビ臭がする」等の問題を抱えているとの話を聞いたことがあります。

・ (P33～35：環境⑤)

データ提示を受けて、水質調査・水生生物調査を実施した地点ごとのデータも確認したいと感じた。資料P35（外来種対策・水質関連）について、今後は根拠データを含めた提示をお願いしたい。

データの信頼性や公開範囲に配慮しつつ、差し支えない範囲での情報提供を検討してほしい。

→ 承知しました。

2. 工事の進捗状況等について（資料－2）

河川管理者が工事進捗について報告をしましたところ、出席委員より下記のような意見が出されました。

- ・（P15：藤崎地区掘削工事に関する質疑）

資料 P15 の藤崎地区掘削工事について、「流下能力向上のため」と記載されているが、具体的にどのような効果・狙いを想定した工事なのか。図面については、施工途中の形ではなく、最終形（完成形）を示したものを提示してほしい。

→ コスト面から極力ドライ施工となるように陸上部を掘削し、その周辺部を段階的に掘削していく施工としています。また、施工に伴う濁水の発生や環境への影響を抑制しつつ、流下能力の向上を図ることを目的としています。

- ・（資料全体：環境配慮に関する意見）

河川敷において貴重なトンボ類が確認されていると認識している。今回提示された工事写真を見ると、施工前に存在していた護岸の植生が失われており、生物の生息環境としては必ずしも好ましい状況とは言えない。治水上、護岸工事が必要であることは理解しているが、生き物に配慮した工事の進め方を意識してほしい。

工事着手前に、貴重種の確認は実施されているという認識でよいか。治水対策と環境配慮の両立は難しい課題であるが、そのバランスを意識した対応を引き続きお願いしたい。

→ 貴重種の確認を実施しています。また、ご指摘について承知しました。

3. 特定都市河川、濁水状況について（参考資料－1）

河川管理者が特定都市河川、濁水状況について報告をしましたところ、出席委員より下記のような意見が出されました。

- ・（P3：流域治水メニュー（田んぼダム・ため池）に関する意見）

資料 P3 に示されている流域治水メニューのうち、田んぼダムによる治水効果はどの程度見込まれているのか。また、今後の進め方や方向性はどのように考えているのか。

田んぼダムやため池は流域内に点在して配置されるため、流域全体にどの程度効いてくるのかは、かなり複雑な解析が必要になる。引き続き、その点を意識して検討を進めてほしい。

水を「いつ貯められるか」というタイミングも非常に重要な要素である。貴志川は紀の川の中でも重要な支川であり、「上流でしっかり貯めて守る」という考え方が大前提である。一方で、近年は中下流部で局地的に強い雨が降るケースも増えている。中流域で大雨が降った場合、河道で受け持たざるを得ない場面もある。紀の川全体として、流域治水の重要性は今後さらに高まるため、様々なメニューの検討を期待したい。

→ 現時点では、田んぼダムの治水効果を示す具体的な数値は整理できておらず、即時回答できません。効果量については、現在計算により算定を進めているところです。ため池対策についても、自治体と意見交換を行いながら検討を進めている段階となっています。

- ・ (P4～5： 渇水対策)

全国的に渇水が深刻化している中で、1994年（平成6年）の列島渇水時と現在の状況を比較する視点が必要ではないか。当時は、大滝ダムも紀の川大堰も未整備であり、岩出堰付近では瀬切れが発生するなど、非常に深刻な状況であったと記憶している。一方で、平成17年以降、紀の川では取水制限は発生していない。

季節の条件は異なるものの、過去の渇水事例から学ぶという視点は重要であり、ぜひ検討してほしい。

→ 現在の渇水状況については、厳しい状況であるとの認識のもとで報告しています。ご意見を踏まえ、今後の整理・検討に活かしていきます。

4. 意見交換

意見交換を実施しましたところ、出席委員より下記のような意見が出されました。

- ・ (P13： 治水③に関する意見)

冒頭スライドP13で「樹木伐採」とあるが、実際に紀の川を歩くと樹木が多く存在している。自然環境の保全という観点では望ましい一方、流下能力は低下する。そのバランスについて、どのようなスタンスで対応しているのか。また、樹木があることで、洪水時に流速を落とすなどの抑制効果はないのか。

→ 樹木については、死水域と判断される箇所もあり、優先順位を付けて順次伐採を実施しています。コスト面の課題もあり、伐採後の再生を抑えるため、芽を踏み潰すなどの対応も行っています。

地域によっては、水害防備林のような考え方もあります。樹木が流速を低減する効果は一定程度あると考えられます。ただし、環境要素を踏まえた一律の行政判断はしておらず、関係者と意見交換しながら対応している状況です。

今後、検討していくべき重要な課題であります。現行の河川整備計画では、計画流量8,500m³/sに対して、現状の流下能力は確保されています。ただし、現行計画以上の議論を行う場合には、将来を見据えたシナリオ（次期河川整備計画）を示す必要があります。委員のご意見を踏まえ、今後の検討に活かしていきます。

- ・ (親水性・かわまちづくりに関する意見)

観光協会でフォトコンテストを行うと、紀の川の堰や堤防の写真が多く選ばれている。しかし、実際に河原へ降りると、コンクリート護岸が多く、水辺に近づきにくい。可能であれば、親水性を伴った整備を進めてほしい。

→ 「かわまちづくり」などの事業もあり、二見地区などで整備を進めています。水辺に入りやすい工夫を盛り込みつつ、地域の意見も反映して取り組んでまいります。

- ・ (P34： 環境⑤)

水質の項目（P34）を見ると、油流出事故が発生している。大人向けの注意喚起はどのように行っているのか。農薬等が投棄される事例もあり、工夫の余地はないか。

→ 啓発看板の設置などを行っています。油を捨てる人がいる現状も踏まえ、人目につく場所での看板による啓発を引き続き強化していきます。

・ (土砂移動・干潟環境に関する意見)

紀の川大堰・大滝ダムが稼働して約30年が経過している。流量調整が行われる一方で、下流へ供給される土砂の量・質が大きく変化している。紀の川大堰下流では、土砂が減少し、砂漠化したような砂干潟の状態になっている。その結果、ハクセンシオマネキ、シオマネキが消失し、泥干潟に生息するヤマトオサガニもほとんど見られなくなっている。かつての泥干潟環境に近づけるため、洪水時に泥分を流すような運用も検討してほしい。

大滝ダム直下ではアーマーコート化が進んでいるとの指摘もある。土砂の量だけでなく質の連続性も重要な視点である。他河川では、ダムに堆積した土砂を下流へ供給する取組もある。すぐに判断できる内容ではないが、重要な論点である。質の視点も含めたモニタリングをお願いしたい。

紀の川では、狭窄部対策を進めることで、中流域の河道に大きなインパクトを及ぼしている。それが土砂の動態にも影響を及ぼしていくだろうと考えられる。ダム・大堰による土砂遮断を含めて、今が本格的にモニタリングを行うべき時期に来ているのではないか。

→ 河床変動については、定期横断測量により把握しており、大きな変化は確認されておりません。土砂の「質」については、資料を精査しないと評価が難しいです。

大滝ダムでは、規模は大きくないものの、下流への置き土を実施しています。近年は大規模洪水が少なく、自然な再配分には至っておらず、モニタリングもできていませんが、今後置き土の取組は継続し、土砂の再配分後にはモニタリングを行っていきます。

5. その他

河川管理者が、紀の川流域懇談会における情報公開方法について連絡しました。

以上